

photopos 24

2016.4.4 ~ 2016.4.28

【神秘学ポエジー～風遊戯 第48集】

photo ヴァージョン

photopos576-600

神秘学遊戯団

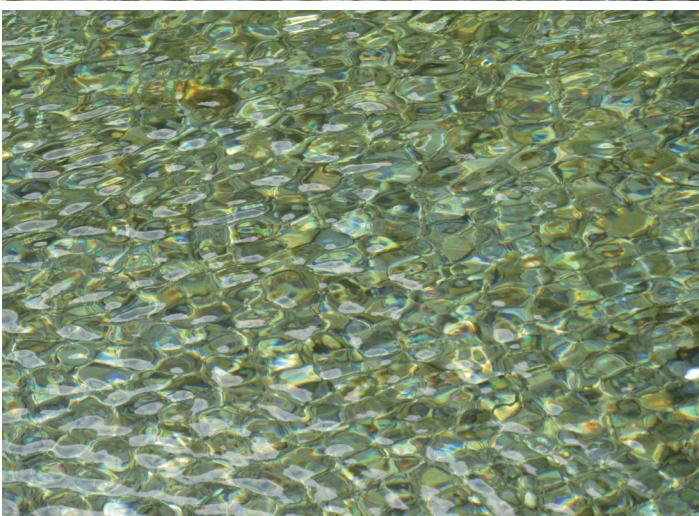
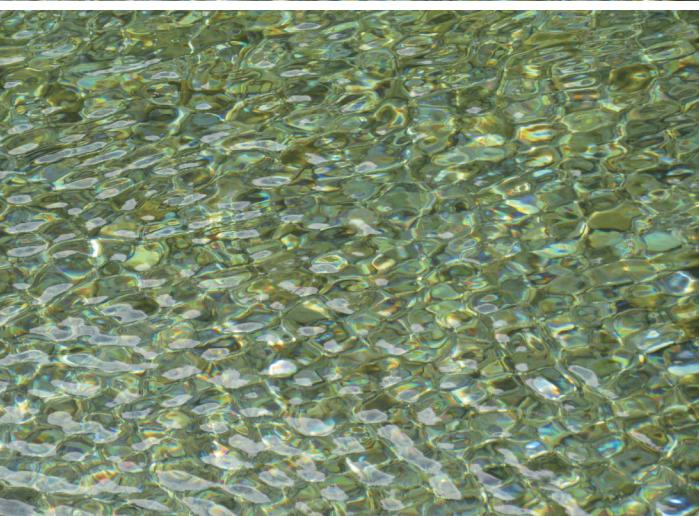
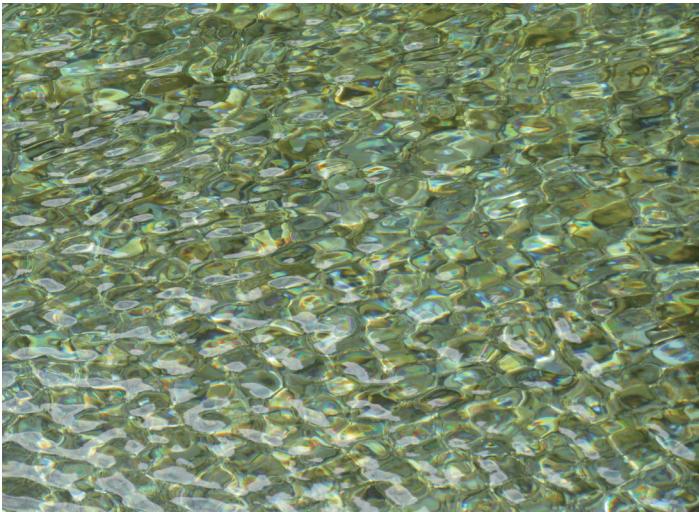
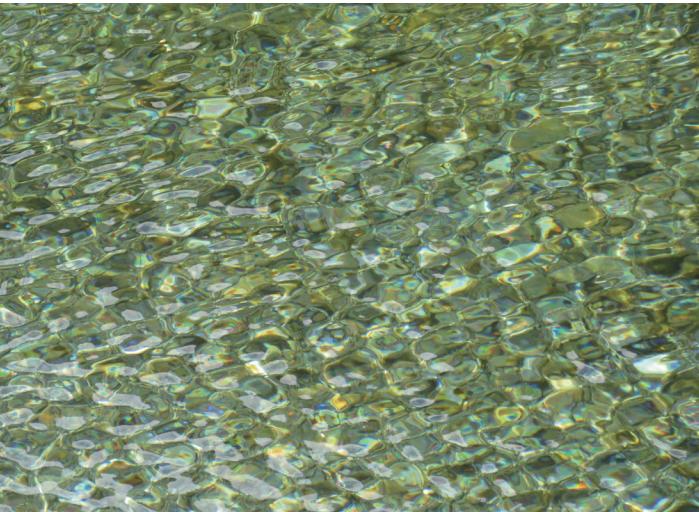
photopos-576

2016.4.4



花になるまえの
花のかたちの
風になるまえの
風のかたちの
心になるまえの
心のかたちの
夢見のような
どこでもない
いつでもない
あわいのなかを

*高知市・牧野植物園にて



世界の果てまで探しても
いちばん大切な宝物は
いつもいちばんそばに

どんな闇の中にいるとしても
いちばん大切な光は
いつもいちばんそばに

辛くひとりで歩くときも
ともに歩き背負ってくれる人は
いつもいちばんそばに

私という謎に迷うときも
世界という謎に惑うときも
いつもいちばんそばに
永遠は輝いているのだから

*高知県仁淀川町土居川（仁淀川上流に合流）にて



ふれると
きえてしまいそうな
せかいのしるしに
とまどう

ことばにすると
うそになてしまう
こころのけしきに
たたずむ



めをあければ
わすれてしまう
ゆめのなかを
およぐ

かぞえると
せつなになてしまう
えいえんのなかに
あそぶ



ふれようとしても
ふれられないもの
思い出そうとしても
思い出せないもの

消そうとしても
消せないもの
忘れようとしても
忘れられないもの

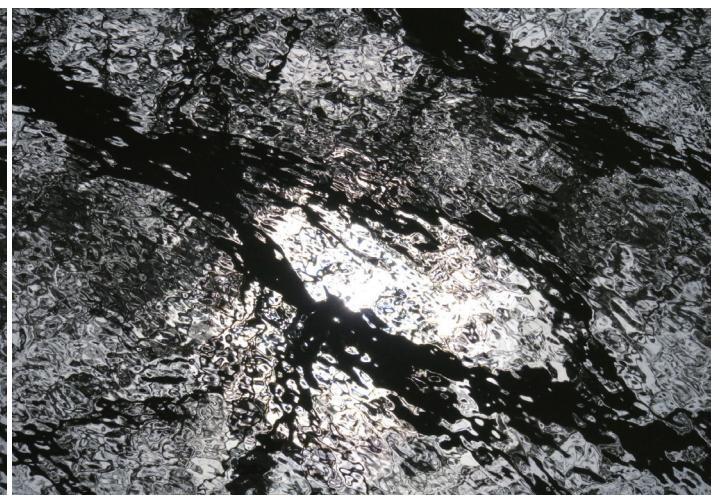
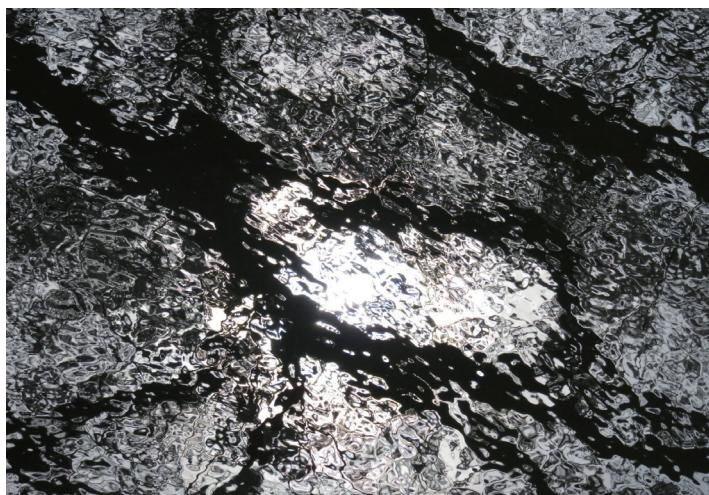
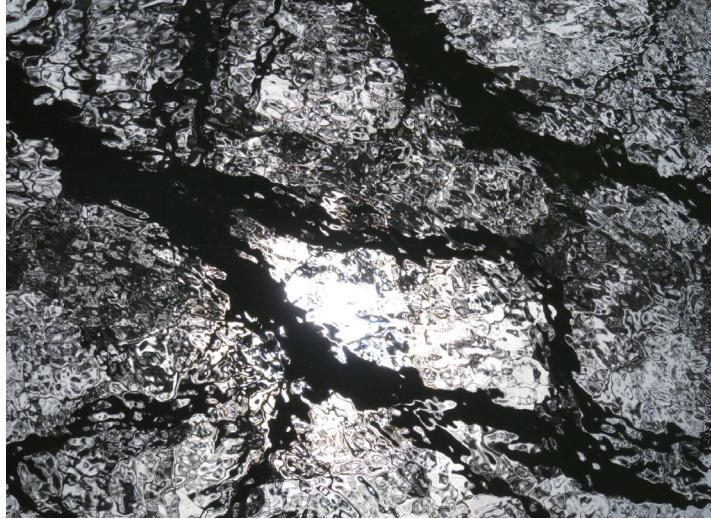
どうして
という言葉が
うそになる

こわいのだ
ほんとうは
知っているから

境を超えるとき
みえてくるものから
目をそらさないで
いられるだろうか

photopos-580

2016.4.8



森を抜けて

光のほうへ

闇になれた目には

光はまぶしすぎる

夢の衣を脱ぐと

現は冷たすぎる

それでも

闇の門をくぐり

光のほうへと

歩いてゆくのだ

*尾道市にて



その名を呼んだとき
すでにそれは
姿をとどめず

流れる水の
ひとしづくのなかに
光を湛えながら
どこかへ消えてゆきました



時の魔術のなかで
その名のことさえ
思い出せないまま



心の河には
魔物が棲んで
渡る私に襲いくる

魔物よ魔物
おまえはだれだ
魔物はこたえる
おまえの影だ

心の河には
支流が流れ
心の行方を見失う

そんなときには
流れの源（もと）へ
そこでは
影は光に還る



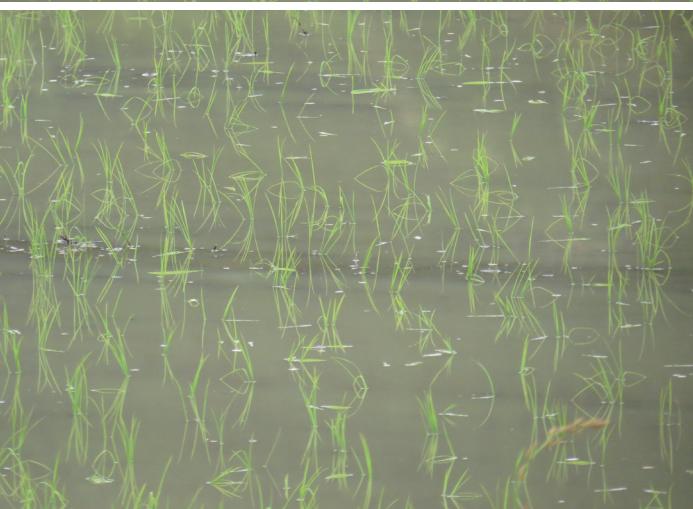
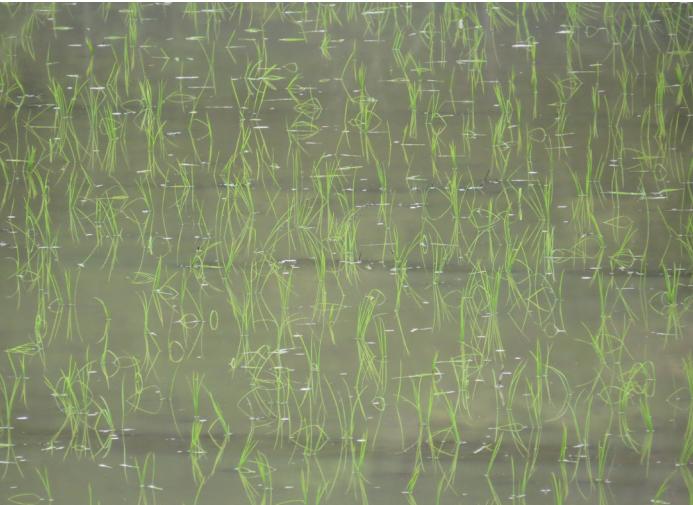
波を見るか
水を見るか
川を見るか
光を見るか
石を見るか



見ることで
隠されるものがある
見ることで
見えなくされるものがある

見ることは
見ないことかもしれない
ほんとうに見るために
隠されたもの
見ていないものをこそ
見ることだ

*高知県仁淀川町土居川（仁淀川上流に合流）にて



踊っているのは
ほんとうは
見えない大地なのだ

歌っているのは
ほんとうは
聞こえない天空なのだ

季節の見えない力よ
わが歩みともにあれ
わが祈りとともにあれ
天と地の交わすむすびのなかで

*高知県日高村・めだか池近く

早場米の田植えあとにて (2016.4.10)



感じることと
考えることは
よく仲違いする

感じることは
考えないことになり
考えることは
感じないことに
なってしまうのだ

感じることは
考えることへ
考えることは
感じることへ
流れ込んでいるのに



気がつけば
そのことばかり
考えている

放たれた思いが
見えない生きものとなって
まわりをうごめいているのだ

気にしたくない
そう思えば思うほどに
生きものはまとわりついてくる



すでに私ではないのに
私のつくりだしてしまった
不思議な生きものたち

見守ることだ
生きものたちを
その形と動きと変化を

するとあらたな思いが
生きものたちを少しずつ
変えていくことに気づくだろう



心の帳（とばり）のその奥に
秘密の場所があるという

秘密の場所に行かんとすれば
ひとりの時をもたねばならぬ
静かにひとりにならねばならぬ

ひとりのなかに流れる川は
大地と天をむすぶという

秘密の言葉を聞かんとすれば
豎琴の耳をもたねばならぬ
奏でる歌を知らねばならぬ



闇のなかで
光を見ることは
やさしい
むずかしいのは
闇のなかにいることに
気づくことだ

光のなかで
光を見ることは
難しい
私のなかで
私を見ることが
難しいように



光のほうへ
行こうとするならば
光が隠してゆくものに
注意深くなければならない



光は見えない闇をつくる
見えない闇は
見えない私のなかで
黒い獣となって潜んでいる

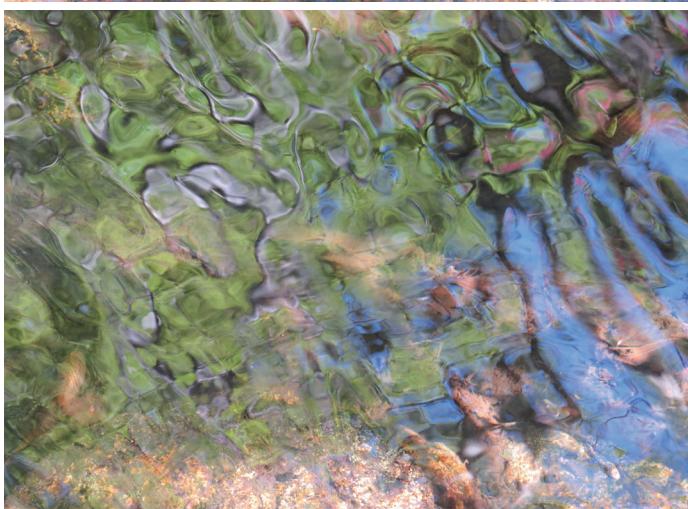
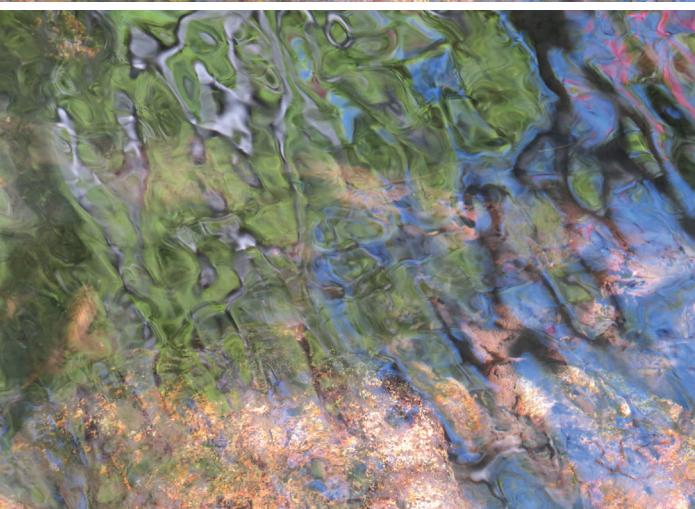
黒い獣よ
かつて光の姿をしていた
光を憎む者よ
己の姿を現せ

その犠牲によって
つくられた世界から
その培われた力で
光のさらに先を行け

*高知県仁淀川町土居川（仁淀川上流に合流）にて



つかのまの
存在の調べのよう
音のまにまに
降りつづける
光の粒は
私という混沌
夢と現のあいだを
遊んでいるのか
私は流れに心をゆだね
訪れくる時を待つ



ぼくの手は
星はつかめないけれど
大地にふれることはできる

ぼくの耳は
宇宙の音楽は聴けないけれど
水の声を聴きとることはできる

ぼくの愛は
地球は救えないだろうけど
光と遊ぶことはできる

ラヴ・ソングを歌おう
光と水のラヴ・ソング
ラヴ・ソングを歌おう
自由と遊戯のラヴ・ソング

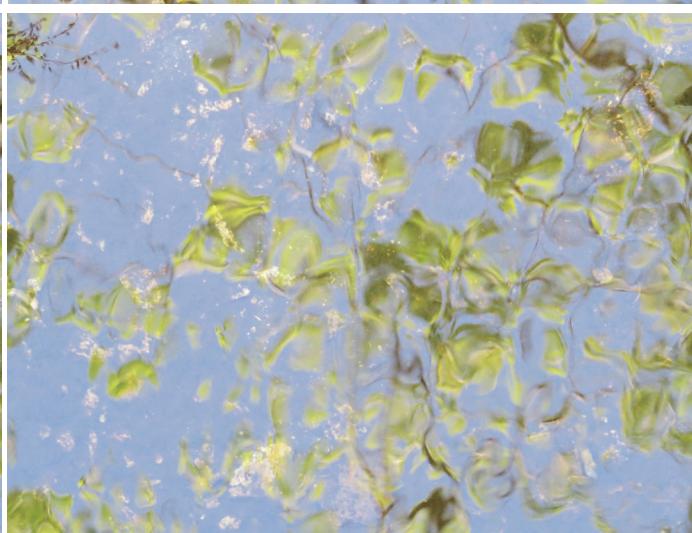
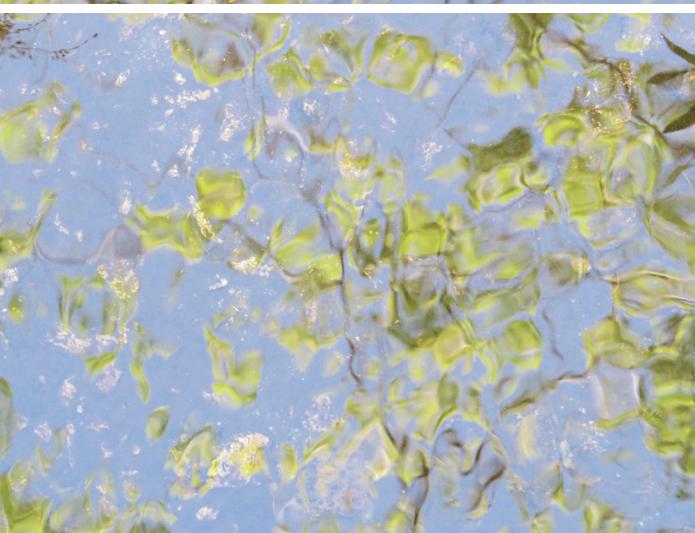
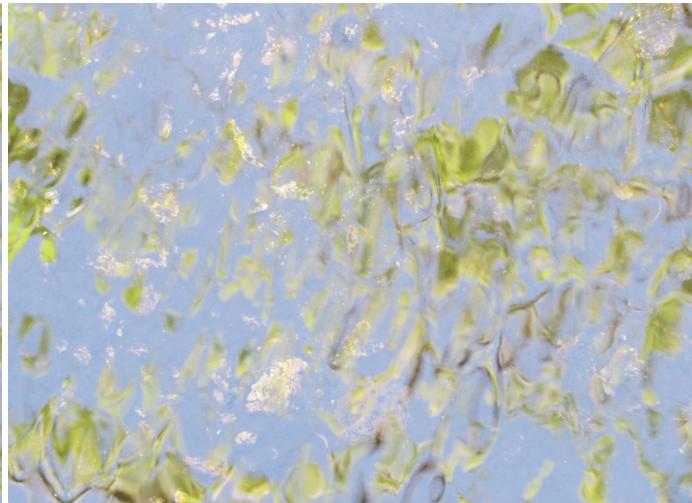


おもいになるまえのこころ
ひかりにまるまえのことば
わたしになるまえのわたし
こえのなみゆらゆらゆれて
うたのようにひびきはじめ
ゆめのうつのさめるまで

*高知県日高村・めだか池にて

photopos-593

2016.4.21



しばしとどまれ
わが夢のあとさき

なくしたものも
いまだ来たらぬものも
すべては
永遠の光の庭に

彼方から訪れる
懐かしい声は告げるだろう
失われるものは
なにもないのだと

*高知市・牧野植物園にて



待つことは
言葉をなくすだろう

待つことは
時を深めるだろう

待つことは
心を溶かすだろう

待つことは
みずからを許すだろう

待つことは
祈りへと向かうだろう



降りしきる夢の底に
わたしの光が眠っている

忘れていたことさえ
忘れていたよ

あてどない旅
ひさかたの空に
浮かぶ雲のように

わたしの光が
流れてゆくよ
降りしきる夢のなかで
わたしが歌っているよ

かつて封印された
しるしのこと
だれも読めなくなった
古代の文字のこと
地中深く眠っていた
竜の宝のこと

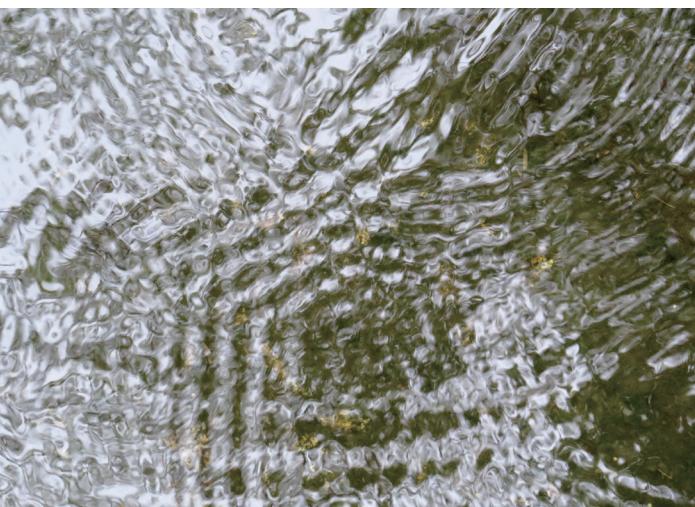
ああ
忘れていたよ
忘れていたことさえ
忘れていたよ



闇が訪れ
魂の飢餓のときは
ひとり踊れ

みずからを
笑いのめし
狂気を踊れ
闇のなかでは
狂気こそが光になる
みずからを映す鏡になる

すると
光のなかではみえない
秘密の文字が
聖なるものを求めて
狂気を踊りはじめるのだ

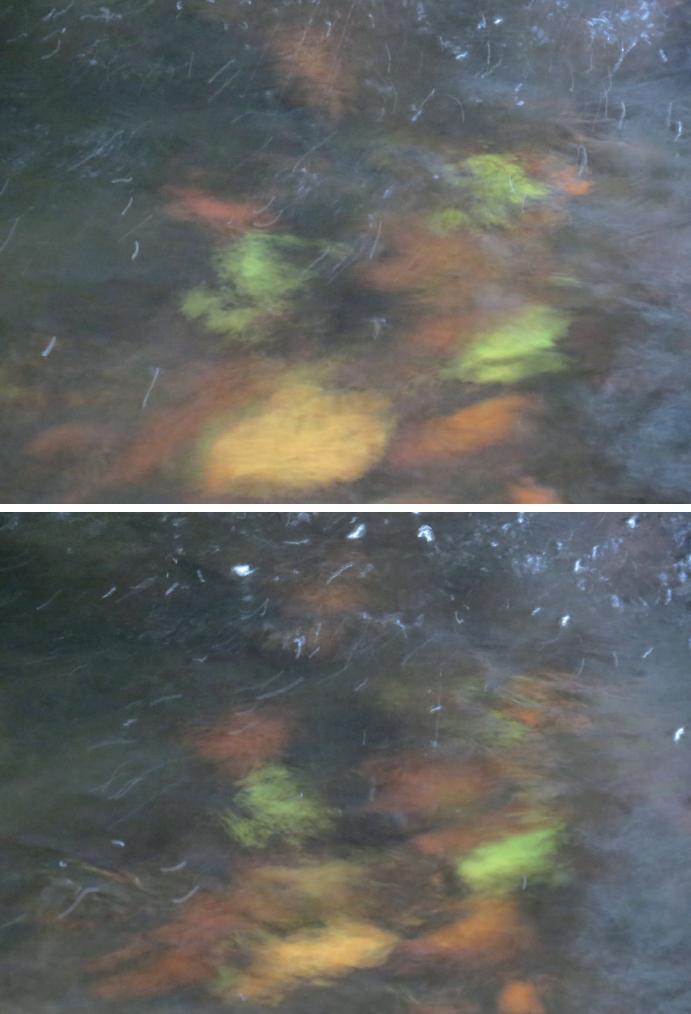


波紋の広がるときは
広がりのなかにありながら
広がりを愛することだ
そして波紋を遡れ
源にある滴を見るのだ

心乱れたときは
乱れとともにありながら
乱れを愛することだ
そして乱れを遡れ
源にある欲を見るのだ

失意の寄せ来るときは
失意のなかにありながら
失意を愛することだ
そして失意を遡れ
源にある望を見るのだ

不条理の来るときは
不条理のなかにありながら
不条理を愛することだ
そして不条理を遡れ
源にある道を見るのだ



生は よきかな

花咲けば 花と遊び

風吹けば 風と遊び

雨降れば 雨と遊ぶ

生は よきかな

目をあければ 見えるもの

目をとじれば 見えるもの

生は よきかな

生の彼方も またよきかな

私をひらけば 顕れるもの

私をとじれば 顕れるもの



私という
形の刹那で
時は踊る
ひとときも
留まることなく

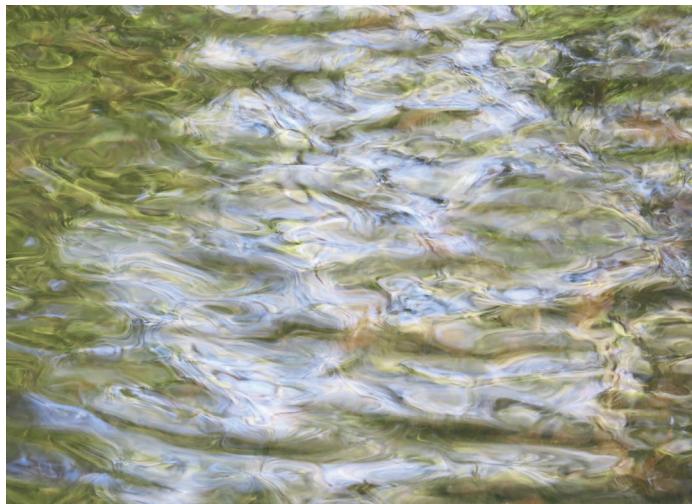
されど
なにひとつ
失われるものはない
刹那の奥では
時が笑っているのだ



*高知県北川村「モネの庭」マルモッタンにて

photopos-600

2016.4.28



微睡みのなか

夢の襞を纏う

水鏡よ

おまえの奥に広がる
迷宮へと誘え

数かぎりない夢

夢は夢を生み

現をも生む

姿を変えた私よ

時を超え彷徨う私よ

やがて訪れる光の種を待て

*高知市・牧野植物園にて